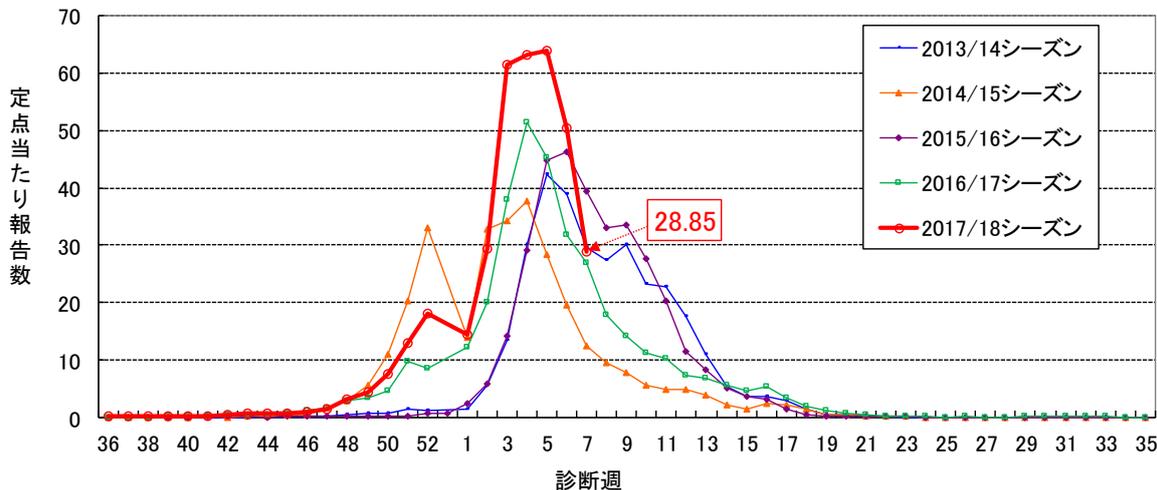


【今週の注目疾患】

【インフルエンザ】

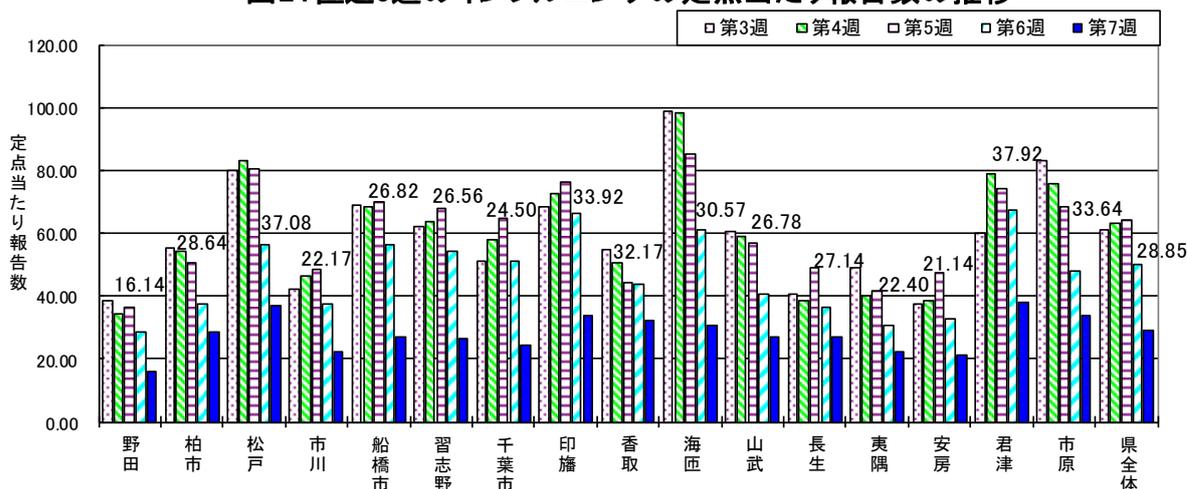
2018年第7週に県内定点医療機関から報告されたインフルエンザの定点当たり報告数は28.85(人)となり前週(50.42)より減少した(図1)。

図1: 2013～2018年第7週に県内定点医療機関から報告されたインフルエンザの定点当たり報告数の推移(シーズン別)



報告は県内16保健所管内(千葉市、船橋市および柏市含む)全てで前週より減少した。君津(37.92)、松戸(37.08)、印旛(33.92)、市原(33.64)、香取(32.17)、海匝(30.57)において県レベルの報告数(28.85)を超えている(図2)。千葉県ではインフルエンザ警報を引き続き発令している。なお、昨シーズン(2016/17シーズン)は第14週に県内全保健所管内で定点当たり報告数(10)を下回り、警報の解除となった。

図2: 直近5週のインフルエンザの定点当たり報告数の推移



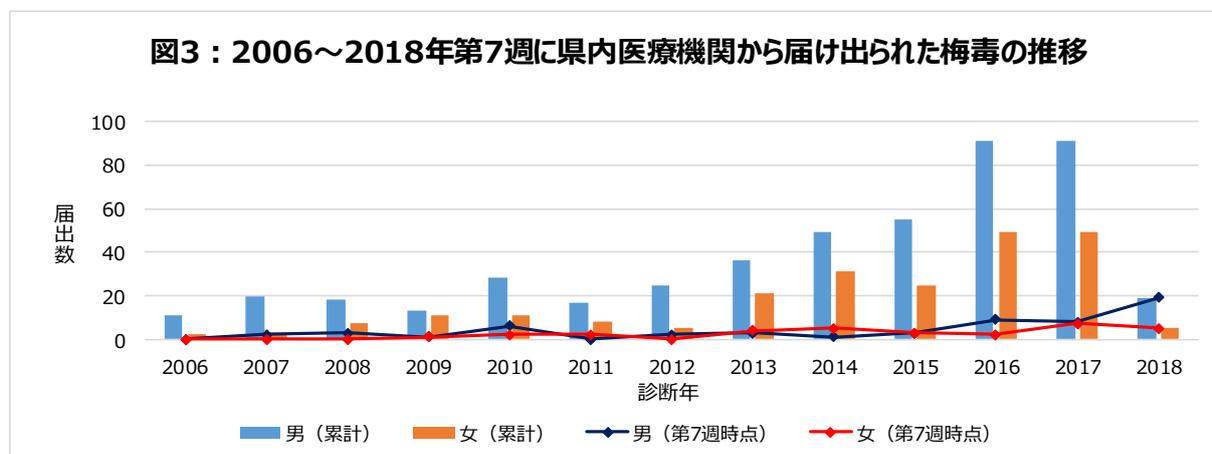
第7週の年齢群別報告割合では、5～9歳(26.2%、前週32.0%)、0～4歳(16.6%、前週15.8%)、10～14歳(16.4%、前週17.6%)が多かった。第7週の県内の小児科・インフルエンザ定点医療機関の協力による迅速診断結果5,892例の報告は、A型1,303例(22.1%)、B型4,557例(77.3%)、A and B型3例(0.1%)、A or B型29例(0.5%)であった。A型、B型ともに報告は前週より減少した。報告に占める成人例の割合がここ数週わずかに増加傾向にある。

基幹定点（9医療機関）からのインフルエンザ入院サーベイランス報告においては35例の報告を認め、前週（32例）から増加した。年齢群別では80歳以上12例、70代7例、60代5例、40代1例、20代1例、10代2例、5～9歳3例、1～4歳2例、1歳未満2例であった。

【梅毒】

2018年第7週に県内で1例の梅毒の届出を認め、2018年のこれまでの累計は24例（男性19例、女性5例）となった。推定感染経路が性交であった届出例について、男性は異性間性交10例、同性間性交3例、両方に記載があったもの1例、不明2例であった。女性は異性間性交が5例であった。先天梅毒の届出はなかった（先天梅毒の直近の届出は2015年第52週である）。

千葉県では梅毒の届出は増減を繰り返しながら増加傾向にあったが、2016年は前年比60例増と大きく増加し、2017年も前年と同じ140例の届出を認めた（図3）。2018年は第7週時点で2016年同時期の11例、2017年同時期の15例を上回り、特に男性の届出が多い。



近年、男性は20代～60代の幅広い年齢群で届出の増加を認める。2014年に40代の症例が大きく増加し、2014年と2015年は40代が最も多く、その後も40代からは一定の届出を認める。さらに最近では20代、30代の届出が増加し、2017年は20代の届出例が最も多かった。一方、女性は20代の届出の増加が顕著であり、10代と20代では女性と男性の割合はほぼ同じである（図4-1、4-2）。

梅毒の感染連鎖を防ぐため、感染が疑われる症状がみられた場合には、早期に医師の診断・治療を受け、必要に応じてパートナーに対しても教育・啓発、検査等を実施する必要がある。リスクの高い集団に対してのみならず、広く梅毒について啓発をしていく必要がある。

